

日本人の権威主義のパーソナリティ に関する研究 (2)

天皇に対する態度と 権威主義のパーソナリティ

——東京都 23 区を対象とした調査研究——

齊 藤 哲 雄

1. はじめに

天皇制イデオロギーを支えた諸制度の中核をなすものとして、家父長制家族制度と氏子調制度があげられる。

家父長制家族制度は、制定される以前まで武士、豪商、豪農のみに認められていた戸主権をすべての階層に強制し、天皇—官吏—戸長—戸主という支配秩序を制度としたものであった。この家父長制イデオロギーが、心理的に国家を家の延長、拡大であり、天皇は「大家長」、民衆は天皇の「赤子」であると考えさせることを容易にしたことは周知のとおりである。

川島武宜氏は、家父長制家族制度が制定されるまでの日本の家族形態を、主として「武士、豪農、豪商の間に存在した儒教的家族形態」と「一般農村に見られた家族形態」に分けた¹⁾。

儒教的家族においては、家長(戸主)、父、夫は、それぞれ家族、子、妻に対して絶対的権力を保持していた。前者と後者の関係は一方的支配と服従の関係にあった。儒教的家族社会の人間関係においては、「服従者は自らを独立の価値ある主体者として意識することはできない。かれの行為はつねに他者によって規定され、かれは自ら判断し自ら行動することはありえないしまたその能力もない。かれはつねに一人前でない『家子』であり、つねに権力者の『親心』によって庇護されねばならぬ

ものである。自分の決断、自分の行動なきものは、『責任』をおうこと
はないのである。だが、かれに対する権力者もまた『責任』をおうこと
はない。かれは義務をおうことなく、ただ『権力』のみをもつ支配者で
あり、かれは責任をおうべき何びとをももたない」(川島武宜1950 p. 11)の
であった。

一方農村に見られる家族形態においては、権威は、家長、父、主婦に
分属し、儒教的家族のような家族の人情、情緒によって維持された。
「ここで、家族の人情や情緒を決定するものは、人間の合理的自主的の反
省をゆるさぬところの盲目的な慣習や習俗であるが、(「過度の伝統的価
値態度」²⁾)、(中略)ひとは自分の意識や行動についていちいち自分に納
得させる必要はなく、したがって自分の行動のために合理的理由を考え
たりまたそれを話題とする事は許されない(「反内省」³⁾)。すべては雰囲気
のなかでなんとなくわかっており、またわかっているように思いこま
せるのである。」(同 p. 14~15、() 内筆者加筆)

儒教的家族社会は、家父長制家族制度の原形となったもので、言うま
でもなく典型的な権威主義社会そのものであるが、一般農村に見られた
家族社会も儒教的家族社会のような絶対的な専制はないものの、権威主
義のパーソナリティの性向⁴⁾の一つである「反内省」や「過度の伝統的
価値態度」が重視される権威主義社会の一形態と言うべきものであ
った。いずれの家族社会にしろ、当時の日本の家族社会は強力な権威主義
社会であり、これらの社会を支えた民衆の精神構造は、極めて自律性の
欠如した権威主義のパーソナリティを根底にしていたと考えられる。

氏子調制度とは、宗教の如何を問わず、国民のすべてがそれぞれ各地
の神社の氏子とならなければならない制度である。各神社は、古事記、
日本書紀に見られる神々と適当に結びつけられ、その結果、ほとんどの
神社は、皇室の祖神とされている天照大神と何らかの関係を持たされ
た。従って、いずれかの神社の氏子とされていたすべての国民は、間接
的に皇室の祖神である天照大神を敬うことになる。この制度は他の天皇
の神化政策と共に、「天皇の赤子」という意識を生み出す一因となつた
のである。

民衆がこの氏子調制度を一時的にしろ受け入れた精神的背景の一つに
は、「神仏習合」で明らかなように神も仏も区別しない日本人の信仰に
対する無節操さ、良く言えば、信仰というものを狭義に捉えないで、よ

り普遍的に捉える精神が介在していたと考えられる。だから、幕藩体制において、仏教に対して従属的な存在であった神道の立場が仏教のそれと逆転しても、一部の信徒を除いては、さしたる抵抗もなく受け入れたのである。この精神はすでに私が指摘したように、非合理的権威にも服従する「権威主義的服従性」や自分自身の意識過程や行動の動機について反省しない「反反省」に根ざしている⁵⁾。

さらに、天皇制強化のための補助的役割を果たした「天皇行幸」⁶⁾を、民衆が容易に受け入れた精神的背景の一つにも、ある種の権威あるとされる異郷からの訪問者を歓迎して受け入れる「外者欲待」⁷⁾の心理が存在していたことも考えられる。この心理も「権威主義的服従性」、「反反省」、内集団において権威とみなされる人を侵すものを警戒し、拒絶し、罰しようとする「権威主義的攻撃性」と関連している。

このように天皇制イデオロギーを支えた諸制度や政策の背景を考えた場合、民衆の間に権威主義のパーソナリティが横たわっていたことは否定し難い。

そこで次の仮説が考えられる。仮説——「天皇制が民衆の間に存在した権威主義のパーソナリティを背景に形成された以上、現在の天皇を支持する精神も権威主義のパーソナリティと強い関連がある。」

小研究の目的は、1つはこの仮説証明であり、他はこれに基づいて天皇を支持する精神と権威主義のパーソナリティの関係について考察することである。そのために次の2つの方法を採用した。

(1) a 実際の調査に基づいて、性別、年齢、学歴、職業、支持政党、信仰に対する態度、身分・地位に関する価値観、ナショナリスティックな優越感等の、社会的属性やイデオロギーと、権威主義のパーソナリティとの関係を明らかにする。

b 同様に、これらの社会的属性やイデオロギーと、天皇支持率・不支持率、および支持理由等の天皇に対する態度の関係を明らかにする。

c aの結果とbの結果を比較検討する。ただし、aについては『成城文藝95号』において既に述べた。

(2) 天皇支持・不支持、支持理由による権威主義のパーソナリティの強度を測定する。

2. 社会的属性、イデオロギー等と

天皇支持・不支持、支持理由

これまで日本においては、天皇に対する感情を問う程度の調査はしばしば行われたが、直接的に天皇（制）支持・不支持を問う大規模な調査は、終戦直後のものを除いては見当たらない。調査は実施されているけれども公表されていないのか、あるいは全く実施されていないのかは明らかではない。独自に調査する以外にはない。

私が本稿で使用する「天皇」とは、天皇という一種の地位を指し、また「天皇制」とは天皇の存在が大衆とのかかわり合いにおいて、主要な特質となっている政治制度を指す。ただしこれまでの調査の経験では、大衆の間では、天皇個人に対する崇拜と、政治制度における天皇制支持感情とが複雑に混合していて、「天皇」と「天皇制」の概念に明確な区別がなされていないのが実情である。

調査対象は東京都23区の有権者。まず調査すべき78地点を23区の人口に比例して各区に配分し、各区において無作為に地点を抽出した。さらに抽出された各地点の有権者名簿から、各地点、年齢、性別について層化し、各地点10名合計780名を抽出した。

実際の調査は抽出数780名のうち、転居、死亡、該当者なし、病気・高齢のため調査不能133名を除く、調査可能なサンプル677名に対して行った。回収したもののうち分析に有効なサンプルは501で、実質的な回収率は77.4%。

調査方法は、被調査者が在宅の場合と、60歳以上のすべての場合は面接法。不在の場合は留置法。

まず天皇を必要とするか否かを問う質問に対する回答に応じて、天皇支持強度を次の4つに区分した。

- | | |
|--------------------|-------------|
| 1. 「必要である」 | }……「天皇支持者」 |
| 2. 「どちらかといえば必要である」 | |
| 3. 「どちらとも言えない」 | 「中立」 |
| 4. 「どちらかといえば必要でない」 | }……「天皇不支持者」 |
| 5. 「必要でない」 | |

特に、「1」を「積極的天皇支持者」、「2」を「消極的天皇支持者」と

する場合もある。「4」、「5」はサンプルが、それぞれ40、57と少ないので、併合して分類した。

次にこの質問に対して陽反応を示した人を「天皇支持者」とし、支持理由を次の4つから選択させた。

1. 国の政治のまとまりを保つために天皇は必要である。
2. 戦争後、われわれの道徳やものの見方がずいぶん混乱してきたので、天皇を中心とした道徳で国民の気持ちをひきしめるため必要である。
3. 日本国民統合の象徴のため必要である。
4. その他〔記入〕；

「1」および「2」を選択した人は、それぞれ天皇を「政治的に中心となるべき人」、「道徳的に中心となるべき人」として支持している人々であると言える。彼らの天皇観は、戦前の天皇観、あるいはこれに類似のものであると考えられる。「3」を選択した人は、天皇を政治・道徳の中心とは考えないで、憲法に記されているような単なる「象徴」として支持しているものと思われる。前二者は、全体的な回答に差はなく⁸⁾、サンプル数も56、47と少ないので、「1」または「2」を選択した人を併合して、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」とし、「3」を選択した人を「象徴天皇支持者」としよう。

a 男・女の実天皇支持者

「天皇支持率」は、男性56.2%、女性63.2%、「天皇不支持率」は男性22.7%、女性16.0%であった(表2-1)。数値的には有意差の境界にある。

支持理由については、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支

表 2-1 男・女の実天皇支持率

(単位：%)

	積極的天皇支持者	消極的天皇支持者	中 立	天 皇 不支持者	DK	計 (基数)
	天 皇 支 持 者					
男 性	35.9	20.3	20.7	22.7	0.4	100 (251)
	56.2					
女 性	38.4	24.8	20.8	16.0	0	100 (250)
	63.2					

持率」は、男性13.9%、女性27.2%で、女性は男性の約2倍弱の比率を示し、女性の方が大きい。「象徴天皇支持率」は、男性39.0%、女性34.0%と有意差には至らない程度に男性の方が大きくなっている（表 2-2）。

表 2-2 男・女の天皇支持理由

（単位：％）

	政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者	象徴天皇支持者
男性（251）	13.9	39.0
女性（250）	27.2	34.0

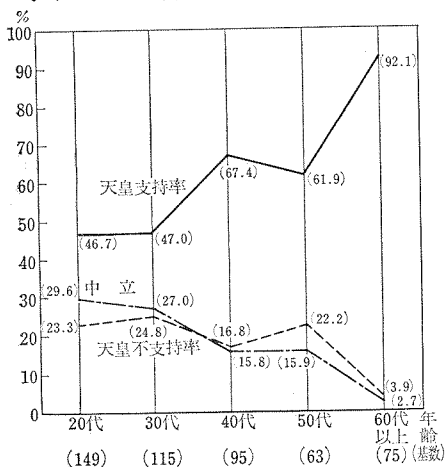
（ ）内は基数

b 年齢と天皇支持者

「天皇支持率」は、若年層（20代、30代）46.8%、中年層（40代、50代）65.2%、高年層（60代以上）92.1%で、全体的には高年齢になるほど大きくなっている。権威主義のパーソナリティの強度を示すA平均スコア⁹⁾において、40代よりも低得点を示した50代（ただし有意差ではない）は、「天皇支持率」においても同様に有意差はないが、40代より小さく

なっている（グラフ 2-1）。

グラフ 2-1 年齢と天皇支持率



「天皇不支持率」は60代以上だけは3.9%と極度に小さいが、他の年代は40代の16.8%を最低に30代の24.8%まで大差はない。

「中立」の占有率は、「高年層」2.7%、「中年層」15.8%、「若年層」28.1%で、年齢が若くなる程大きくなっている。

支持理由については、60代以上を除いて、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持率」は、およそ13~18

%の間にある。「象徴天皇支持率」は40代の45.3%が最高で、支持率が過半数に達した年代は皆無である。60代以上は「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持率」が48.7%もあり、数値的には「象徴天皇

支持率」を上回っている（グラフ2-2）。

c 学歴と天皇支持者

「中学歴」，「高学歴」の「天皇支持率」は，それぞれ55.3%，52.1%，「不支持率」はそれぞれ23.7%，21.4%で両学歴間に差はない。しかし「低学歴」は前二者に比較して，「支持率」は75.4%と大きく，「不支持率」は10.9%と小さい。また「積極的支持者」の占有率も，他の学歴に比べて断然大きい（グラフ2-3）。

低学歴；学歴なし，小学校，尋常高等小学校，新制中学卒

中学歴；旧制中学，新制高校，旧青年学校卒

高学歴；旧制高等専門学校，

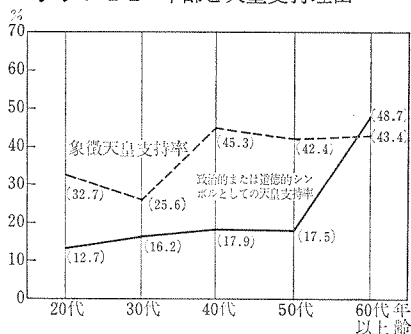
新制大学，旧制大学，短期大学，新制高等専門学校卒，四年制大学在学者

戦後の急激な進学率の増加を考慮すれば，「低学歴」には旧制の占有率が大きく，「高学歴」には新制の占有率が大きいので，「低学歴」の「天皇支持率」が有意差をもって大きいのは当然である。そこで，旧制，新制を区別して，「天皇支持率」，「不支持率」を比較した。

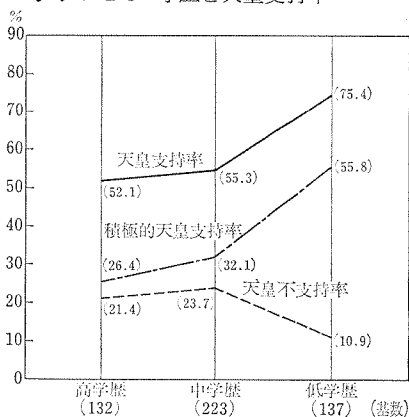
旧制においては，「天皇支持率」，「不支持率」とも各学歴間に有意差はない。ところが，「積極的支持率」を比較すると，やはり「低学歴」は「中学歴」，「高学歴」よりも大きくなっている。旧制においては特に「低学歴」に天皇支持が強いことを示している（グラフ2-4）。

新制においては最初に述べたとおりの傾向を示していて，「天皇支持率」，「不支持率」とも「中学歴」，「高学歴」の間に有意差はなく，「低

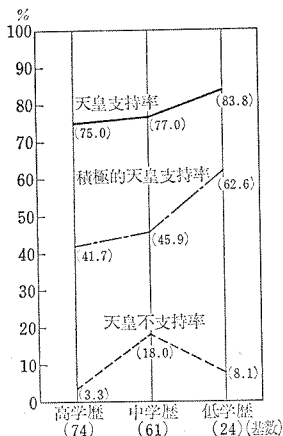
グラフ 2-2 年齢と天皇支持理由



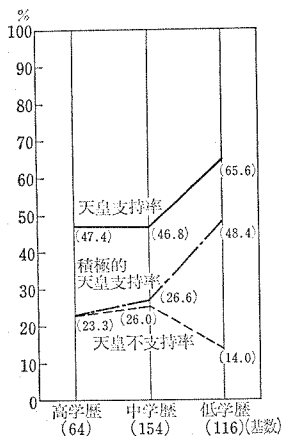
グラフ 2-3 学歴と天皇支持率



グラフ 2-4
学歴と天皇支持率（旧制）



グラフ 2-5
学歴と天皇支持率（新制）

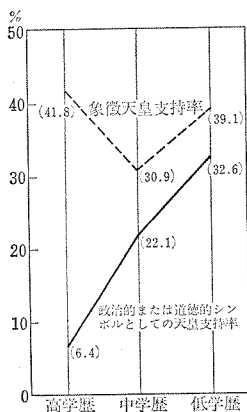


学歴」は前二者に比較して「天皇支持率」は大きく、「不支持率」は小さくなっている（グラフ 2-5）。

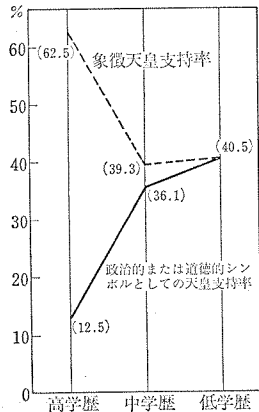
新制においても、旧制と同様、天皇は、「低学歴」においては他の学歴と比較して強い支持があると言える。

支持理由については、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持率」は、新制・旧制とも「高学歴」においては小さいが、旧制の「中学歴」、「低学歴」においては未だに40%前後を保っている。新制の中で

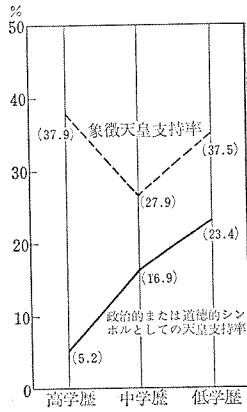
グラフ 2-6
学歴と天皇支持理由



グラフ 2-7
学歴と天皇支持率（旧制）



グラフ 2-8
学歴と天皇支持率（新制）



は「低学歴」に最も支持が大きい。

一方「象徴天皇支持率」は旧制の「高学歴」に最も大きく、ここでは60%を越えている（グラフ2-6, 2-7, 2-8）。

d 職業と天皇支持者

「天皇支持率」が大きいのは「無職」、「内職・パート・アルバイト」、「大企業・官公庁の経営者・管理職」でいずれも80%を越えている。逆に小さいのは「専門職」、「販売・サービス・一般作業職」、「学生」で、いずれも40%前後である（表2-3）。

労働者については、「専門職」は「天皇支持率」、「不支持率」はほぼ同率で、「支持者」のうち、「積極的支持者」が半数にみたない。「販売・サービス・一般作業職」は「支持率」が「不支持率」を上回っているが、有意差とは言えない。「事務職・技術職」、「技能職・熟練職」はともに、「支持率」は50%を越え、「不支持率」の2.4～2.9倍である。「天皇支持率」は、労働者の中では、「低学歴」の多い「技能職・熟練職」に大きく、「高学歴」の多い「専門職」に小さい。

「経営者・管理職」については、「大企業・官公庁」に「支持率」が大

表 2-3 職業と天皇支持率

（単位：％）

		天 皇 支 持 率	天皇不支持率	n
労働者	専門職	37.9 (17.2)	38.0	29
	販売・サービス・一般作業職	43.1 (25.9)	34.5	58
	事務職・技術職	52.5 (27.1)	22.0	59
	技能職・熟練職	53.8 (33.8)	18.5	65
自営業・小企業主		63.6 (43.6)	18.2	55
経営者・管理職	中企業（300人以上、1,000人未満）	60.0 (40.0)	10.0	20
	大企業（1,000人以上） 官公庁	81.8 (45.5)	18.1	11
内職・パート・アルバイト		84.6 (46.5)	11.5	26
家庭婦人（主婦）		63.5 (42.6)	17.4	115
学 生		43.8 (18.8)	12.5	16
無 職		85.0 (62.5)	5.0	40

（ ）内は積極的天皇支持率

きいが、「積極的支持率」のみを比較すると、「自営業・小企業主」、「中企業の経営者・管理職」、および「大企業・官公庁の経営者・管理職」の三者間に差はなく、三者の間ではいずれに支持が強いとも言えない。

定職に就いていない人の間では、「無職」の「支持率」は85%にも及び、しかも「積極的天皇支持率」が60%を越え、「不支持率」はわずかに5%である。「無職」は「高年層」の占有率が圧倒的に大きいためと考える。「内職・パート・アルバイト」は「支持率」では「無職」に並ぶが、「積極的支持率」では50%を割り、「不支持率」も10%を越えている。「家庭婦人(主婦)」は「支持率」は60%を越え、「積極的支持率」も40%を越えて、数的には「自営業・小企業主」とほぼ同率である。「学生」は四者の中では、「天皇支持率」は最も低く50%を割って、「積極的支持率」も20%にみえない。その反面「不支持率」も10%強で決して大きいとは言えない。「学生」には支持でも不支持でもない人が多いのである。

「天皇支持率」は「労働者」全体では48.3%、「経営者・管理職」65.1%、一方「不支持率」は前者が26.5%、後者が16.3%で、天皇は「労働者」よりも「経営者・管理職」に支持が大きいと言える。これはイデオロギーの差もさることながら、「経営者・管理職」の平均年齢は「労働

表 2-4 職業と天皇支持理由

(単位: %)

		政治的または道徳的 シンボルとしての 天皇支持者	象徴天皇 支持者	n
労働者	専門職	6.9	31.0	29
	販売・サービス・ 一般作業職	10.3	29.3	58
	事務職・技術職	11.9	33.9	59
	技能職・熟練職	13.8	36.9	65
自営業・小企業主		21.8	40.0	55
経営者・ 管理職	中企業 (300人以上、 1,000人未満)	10.0	50.0	20
	大企業 (1,000人以上) 官公庁	9.1	72.7	11
内職・パート・アルバイト		38.5	42.3	26
家庭婦人(主婦)		27.8	33.0	115
学 生		6.3	37.5	16
無 職		45.0	40.0	40

者」のそれに比較して高いため、年齢による影響の可能性も考えられないでもない。

支持理由については、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」は、「学生」、「専門職」に少なく(7%未満)、「無職」(45.0%)、「内職・パート・アルバイト」(38.5%)、「家庭婦人」(27.8%)、「自営業・小企業主」(21.8%)の順に多い(表 2-4)。

「象徴天皇支持者」は、「大企業・官公庁の経営者・管理職」に多く70%を越え、その他は大差がない。

以上に挙げたものの中には、職種の細分化によりサンプル数が少なく、再調査の必要のあるものも含まれている。

e 支持政党と天皇支持者

「天皇支持率」は自民党支持層が80.1%と最も大きく、次いで中道四党¹⁰⁾の支持層65.3%、支持政党なし層45.9%で、最も小さいのが、社会党・共産党支持層¹¹⁾38.8%であった。逆に「不支持率」が最も大きいのは、「社会党・共産党」の37.3%、次いで「支持政党なし」23.3%、「中道四党」14.7%、最も小さいのが「自民党」の9.0%であった。

「中道四党」は「天皇支持率」、「不支持率」について言えば、社・共支持層よりもむしろ自民党支持層に近い存在である。一方「支持政党なし」は「社・共」に近い存在である(表 2-5)。

表 2-5 支持政党と天皇支持率 (単位：%)

	天皇支持率	天皇不支持率	n
自 民	80.1 (56.4)	9.0	156
社 ・ 共	38.8 (22.4)	37.3	67
中 道 四 党	65.3 (36.8)	14.7	95
支持政党なし	45.9 (25.6)	23.3	172

() 内は積極的天皇支持率

支持理由については、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」の占有率は、「自民党」30.8%、「中道四党」17.9%、「支持政党なし」15.1%、「社・共」10.4%で、自民党支持層の約3分の1近くを占めているのが目立つ。「象徴天皇支持者」は、「自民党」47.3%、「中道四党」41.4%、「社・共」25.4%、「支持政党なし」29.7%であった。ここでも「支持政党なし」は、「自民党」より「社・共」に近いと言える(表 2-6)。

表 2-6 支持政党と天皇支持理由

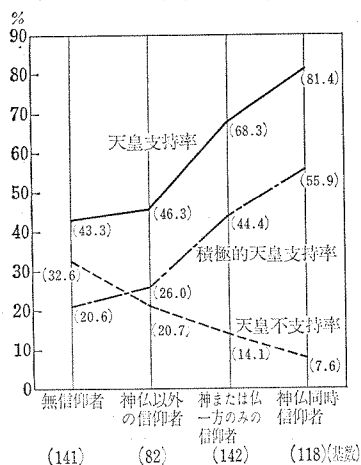
(単位：%)

	政治的または道徳的 シンボルとしての 天 皇 支 持 者	象徴天皇支持者	n
自 民	30.8	47.3	156
社 ・ 共	10.4	25.4	67
中 道 四 党	17.9	41.1	95
支持政党なし	15.1	29.7	172

f 信仰と天皇支持者

「天皇支持率」は、「神仏同時信仰者」は81.4%に及ぶが、「神または仏一方のみの信仰者」は68.3%、「神仏以外の信仰者」,「無信仰者」¹²⁾は50%にみえない。また「積極的天皇支持率」は、前二者がそれぞれ55.9

グラフ 2-9 信仰と天皇支持率



%, 44.4%に対し、後二者はそれぞれ26.0%, 20.6%と小さい。

「不支持率」については、「神仏同時信仰者」7.6%、「神または仏一方のみの信仰者」14.1%、「神仏以外の信仰者」20.7%、「無信仰者」32.6%であった。

「無信仰者」は、「積極的天皇支持率」よりも「不支持率」の方が大きくなっている(グラフ 2-9)。

支持理由については、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」は、「神仏同時信仰者」36.4%、「無信仰者」14.2%で、前者は後者の約2.5倍になっている(表 2-7)。

神仏を同時に信仰する精神と天皇を支持する精神、特に「政治的また

表 2-7 信仰と天皇支持理由

(単位：%)

	政治的または道徳的 シンボルとしての 天 皇 支 持 者	象徴天皇支持者	n
神 仏 同 時 信 仰 者	36.4	42.4	118
神または仏一方のみの 信仰者	20.4	43.7	142
神 仏 以 外 の 信 仰 者	14.6	34.1	82
無 信 仰 者	14.2	28.4	141

は道徳的シンボル」として天皇を支持する精神は関連があると思われる。

g 身分・地位に関する価値観と天皇支持者

「天皇支持率」は内容主義的な「現代的価値観グループ」が最も小さく、「中間的価値観グループ」, 形式主義的な「非現代的価値観グループ」¹³⁾と古い価値観を持つグループになるに従って、ゆるやかではあるが大きくなっている。

「不支持率」は逆に「現代的価値観グループ」が最も小さく、「中間的価値観グループ」, 「非現代的価値観グループ」と古い価値観を持つグループになるに従って、ゆるやかではあるが小さくなっている(グラフ 2-10)。

支持理由については、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持率」は、「非現代的価値観グループ」が29.8%と他のグループに比較してやや多いが、「中間的価値観グループ」, 「現代的価値観グループ」との間に差はない。「象徴天皇支持率」は三者の間では差はない(表 2-8)。

グラフ 2-10

身分・地位に関する価値観と天皇支持率

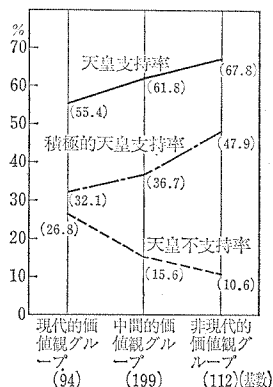


表 2-8 身分・地位に関する価値観と天皇支持理由

(単位: %)

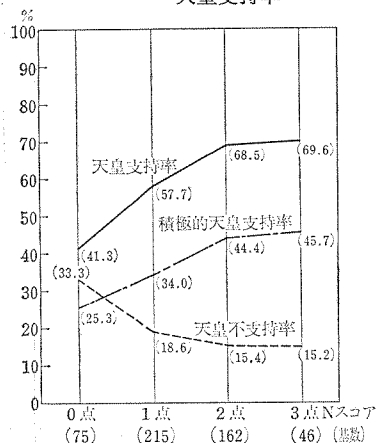
	政治的または道徳的 シンボルとしての 天皇支持者	象徴天皇支持者	n
現代的価値観グループ	20.5	33.9	112
中間的価値観グループ	19.1	38.7	199
非現代的価値観グループ	29.8	35.1	94

h ナショナリスティックな優越感と天皇支持者

「天皇支持率」は、ナショナリスティックな優越感の強度を示すNスコア¹⁴⁾の0点グループが41.3%と最も小さく、1点グループ57.7%, 2点グループ68.5%と、Nスコアが高得点になるにつれて上昇し、2点グループから3点グループはほぼ横這い状態になっている。「積極的天皇支持率」も同様の傾向を示している。

一方「不支持率」は、0点グループが33.3%と最も大きく、1点グループ, 2点グループ, 3点グループは、それぞれ18.6%, 15.4%, 15.2

グラフ 2-11 Nスコアと
天皇支持率



%と後三者の間に有意差はない(グラフ2-11)。

支持理由については、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持率」は、どのグループが大きいとも言いきれないが、「象徴天皇支持率」はNスコアが高得点になるに従って大きくなっている(表2-9)。

以上の結果から、ナショナリスティックな優越感は天皇を支持する心理と部分的には交差するが、「天皇支持率」において、Nスコアの2点グループと3点グループの間に有意

差がないこと、また「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持率」においてNスコアの各得点グループに有意差がないことを考えると、両者は必ずしも一致するものではないと思われる。

表 2-9 Nスコアと天皇支持理由

(単位：%)

		政治的または道徳的 シンボルとしての 天 皇 支 持 率	象徴天皇支持率	n
Nスコア	3点	21.7	47.8	46
"	2点	25.9	41.4	162
"	1点	16.7	35.8	215
"	0点	20.0	21.3	75

3. 天皇支持・不支持、支持理由による 権威主義のパーソナリティの強度

社会的属性、イデオロギー等と「天皇支持率」についての結果を要約すると、「天皇支持率」は、

- 女性は男性より大きいとは断言できないが、その傾向にある。
- 全体的には「高年層」が最も大きく、次いで「中年層」、「若年層」と年代が若くなるに従って小さく、50代は40代よりも小さい(有意差ではない)。
- 全体的には「低学歴」は「中学歴」、「高学歴」よりも大きく、た

だし旧制においてはこれらの学歴間に有意差があるとは言えない。

- (d) 「無職」, 「内職・パート・アルバイト」, 「大企業・官公庁の経営者・管理職」が大きい。
- (e) 「自民党支持層」は, 「社会党・共産党支持層」, 「支持政党なし層」よりも圧倒的に大きい。
- (f) 「神仏同時信仰者」は, 「神仏以外の信仰者」または「無信仰者」よりも大きい。
- (g) 「非現代的価値観グループ」は「現代的価値観グループ」よりも大きい。
- (h) 全体的には, ナショナリスティックな優越感の強い人は弱い人よりも大きい, ナショナリスティックな優越感が強い人ほど大きいとは言えない。

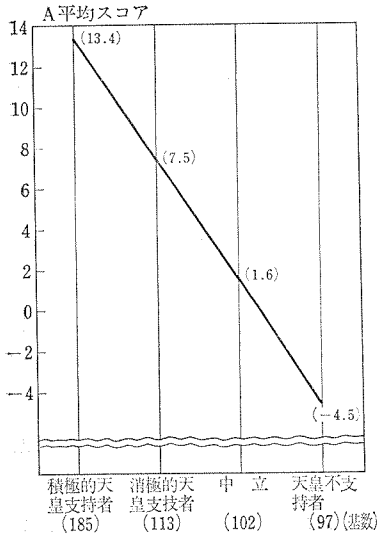
しかも(h)以外のこれらの特徴の傾向は, 「象徴天皇支持者」よりも「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」に顕著に見られる。

一方, 「成城文藝」第95号で既に述べた社会的属性, イデオロギー等と権威主義のパーソナリティの関連を大まかに要約すると, 権威主義のパーソナリティは

- (a) 女性は男性より強いとは断言できないが, その傾向にある。
- (b) 全体的には「高年齢」になるほど強いが, 50代は40代より低い(ただし有意差ではない)。
- (c) 全体的には「低学歴」になるほど強いが, 旧制においては「中学歴」, 「高学歴」間に有意差はない。
- (d) 「無職」, 「自営業・小企業主」が強い。
- (e) 「自民党支持層」は「社会党・共産党支持層」, 「支持政党なし層」, 「中道四党支持層」よりも圧倒的に強い。
- (f) 「神仏同時信仰者」は, 「神仏以外の信仰者」または「無信仰者」より強い。
- (g) 「非現代的価値観グループ」は「現代的価値観グループ」よりも強い。
- (h) 全体的にはナショナリスティックな優越感の強い人は弱い人よりも強いが, ナショナリスティックな優越感が強い人ほど強いとは言えない。

社会的属性やイデオロギーにおいて, 「天皇支持率」の大きい集団と,

グラフ 2-12 天皇支持強度と
A平均スコア



「天皇支持者」, 特にその中の「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」は, 「天皇不支持者」よりも権威主義のパーソナリティが強いことが予測される。しかしこれはいわば情況証拠にすぎない。そこで, 天皇支持・不支持の強度, および支持理由と, 権威主義のパーソナリティの強度の関係を具体的に検証する。

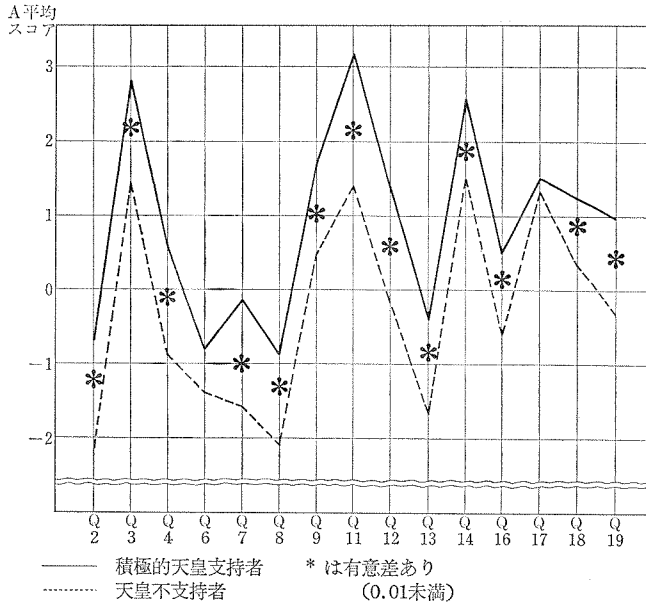
権威主義のパーソナリティの強度を示すA平均スコア¹⁵⁾は, 「積極的天皇支持者」13.4, 「消極的天皇支持者」7.5, 「中立」1.6, 「天皇不支持者」-4.5と, 4グループに細分したにもかかわらず, ほぼ等間隔に,

しかも明瞭な有意差(危険率0.03未満)が見られる(グラフ 2-12)。

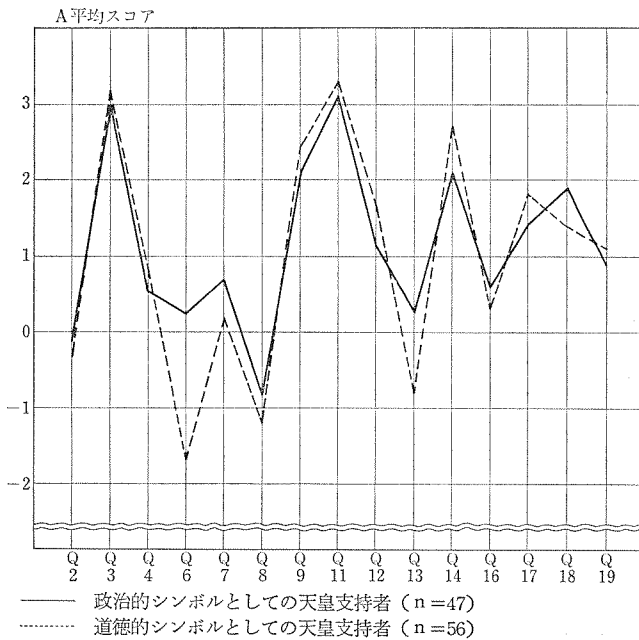
表 2-10 天皇支持強度と各項目のA平均スコアの大小

	積極的 支持者 n=185	消極的 支持者 n=113	中立 n=102	不支持者 n=97
Q 2	-0.64 >	-1.15 >	-1.18 >	-2.21
Q 3	2.86 >	2.51 >	1.67 >	1.44
Q 4	0.54 >	0.48 >	-0.39 >	-0.91
Q 6	-0.79 >	-1.08 =	-1.08 >	-1.38
Q 7	-0.14 >	-0.37 >	-1.22 >	-1.57
Q 8	-0.88 >	-1.22 >	-1.35 >	-2.08
Q 9	1.73 >	1.10 >	0.55 >	0.49
Q 11	3.17 <	2.71 >	2.10 >	1.38
Q 12	1.30 >	0.74 >	0.43 >	-0.16
Q 13	-0.39 >	-0.88 >	-1.33 >	-1.67
Q 14	2.58 >	2.15 >	1.35 <	1.48
Q 16	0.49 <	0.50 >	0.43 >	-0.62
Q 17	1.47 >	0.99 <	1.15 <	1.32
Q 18	1.21 >	0.80 >	0.73 >	0.33
Q 19	0.96 >	0.14 >	-0.20 >	-0.32

グラフ 2-13 天皇支持強度とA平均スコア



グラフ 2-14 天皇支持理由とA平均スコア



符号テスト (sign test) においても有意差が見られる (表 2-10)。

少なくとも東京都においては、「天皇支持強度」の強い人ほど、権威主義のパーソナリティが強いと断言できる。

次に天皇支持理由と権威主義のパーソナリティの強度の関係について検証した。

A平均スコアは、「政治的シンボルとしての天皇支持者」16.9,「道徳的シンボルとしての天皇支持者」15.2,「象徴天皇支持者」9.1で,「政治的シンボルとしての天皇支持者」と「道徳的シンボルとしての天皇支持者」の間に有意差はない。また各質問別のA平均スコアにおいても全体的な差は見られなかった(グラフ 2-14)。戦前の天皇制においては,政治的最高権威と道徳的最高権威が一体となって存在していたことが,支持者の精神構造の上からもうかがえる。

そこでこれまで通りサンプル数も考慮して両者を併合すると,「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」のA平均スコアは16.1で,「象徴天皇支持者」よりも有意に大きい(表 2-11)。

また権威主義のパーソナリティに関する15項目の質問の符号テストに

表 2-11 天皇支持理由とA平均スコア

	政治的または道徳的 シンボルとしての 天 皇 支 持 者	象徴天皇支持者
A平均スコア	16.1	9.1
n	103	182
S. D	10.8	14.3

表 2-12 天皇支持理由と各項目のA平均スコアの大小

	政治的または道徳的 シンボルとしての 天 皇 支 持 者 n=103		象徴天皇 支持者 n=182			政治的または道徳的 シンボルとしての 天 皇 支 持 者 n=103		象徴天皇 支持者 n=182	
Q 2	-0.17	>	-1.32		Q 12	1.42	>	0.98	
Q 3	3.03	>	2.60		Q 13	-0.23	>	-0.70	
Q 4	0.64	>	0.46		Q 14	2.39	<	2.48	
Q 6	-0.62	>	-0.99		Q 16	0.45	<	0.46	
Q 7	0.45	>	-0.47		Q 17	1.63	>	1.14	
Q 8	-0.98	>	-1.11		Q 18	1.67	>	0.74	
Q 9	2.25	>	1.24		Q 19	0.99	>	0.43	
Q 11	3.18	>	2.96						

においても、A平均スコアが前者が後者よりも低いのは、わずか2項目で、有意差が確認された(表 2-12)。

同じ「天皇支持者」でも、戦前の天皇観、あるいはそれに類似した天皇観を保有していると考えられる「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」は、権威主義のパーソナリティが強いのである。

4. 天皇(制)と権威主義のパーソナリティ

a 天皇支持と権威主義のパーソナリティの関係について

これまでの結果を総合すると、第1に、社会的属性やイデオロギーにおいて、「天皇支持率」の大きい集団、特にその中の「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持率」の大きい集団と、権威主義のパーソナリティの強い集団はあまりにも一致していた。第2に、明確な有意差をもって、天皇支持強度が強くなるに従って、権威主義のパーソナリティは強かった。第3に、「天皇支持者」の中でも特に「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」の権威主義のパーソナリティが強かった。これらのことから、天皇を支持する精神構造、特に政治的または道徳的シンボルとして天皇を支持する精神構造と、権威主義のパーソナリティは、極めて強い相関があると考えられる。それでは、その相関とは具体的にどのようなものか考察してみよう。

項目別のA平均スコアについて、「積極的天皇支持者」と「天皇不支持者」を比較すると、危険率0.01未満で、15項目中13項目に明確な有意差が見られた(グラフ 2-13)。これは一つには、権威主義のパーソナリティと「天皇支持」の関係の深さを示すものであり、一つには権威主義のパーソナリティを形成する性向の相互作用¹⁶⁾を示すものとする。

権威主義のパーソナリティの強力な個人は、権威主義的抑圧を甘受する傾向が強い(「権威主義的服従性」)。権威に対する反抗は、彼に不安や畏怖の念等の緊張を惹起させる。もちろん、この反抗は、単に欲求不満の小さなけ口となる軽口やデマなどの表面的な反抗ではなく、心からの反抗をさすのである。この緊張の回避あるいは緩和の手段として、権威に対して服従的な行動をとるのである。

彼は、権威によって命令されたことに関しては、その遂行のみに専念し、その行動の良否についてはさしたる関心を示さない¹⁷⁾。それは根底

において、自己を権威の代理と考え、それゆえ彼の行動そのものに対しては、ほとんど責任を持たないと考えるような「無責任性」が流れているからである。しばしば指摘される天皇制ファシズム下の軍国主義者の「無責任性」¹⁸⁾もこのことと関連があると思われる。

彼の「権威主義的服従性」は、さらに他の領域にまで拡大され、一般的欲求に対しても抑制過剰にさせる。同時に自律性の欠如を招き、ごく平均的な人間なら誰でも、自身で決定可能な事象さえも、彼自身での決定を回避する。

彼にとっての権威の容認が予測できない事態に対しては、多くの人と同一歩調をとることによって、孤立する不安から逃れようとする。

天皇支持についても、彼にとっての権威の指示がなくても、彼が、天皇が多くの人々に支持されているというイメージを保有している場合には、その存在の合理性、非合理性についての疑問を生じることは少なく、支持に傾倒すると考えられる。

彼はまた、一般の人々の天皇に対する支持が強力であると意識しない場合でも、「権威主義的服従性」、「反内省」のために、天皇が現実存在し、多くの人がそれを否定していないと考えられる場合には、その存在の意味について深く考察することなく、ただ「現実存在しているから。みなも否定していないから。」ということで否定しない場合がある。この場合も、根底には、多くの人から逸脱する不安を回避し、多くの人と一体化した安定感を獲得しようとする心理が働いている。

「権威主義的服従性」、「反内省」より生ずる自律性の欠如した状態は、彼を、世間一般で行われているような既成の行動に走らせがちである。すなわち、伝統、習俗等への過度の依存的傾向——「過度の伝統的価値態度」が生じる。彼は極めて紋切り型の行動、思考になり、その鋳型にはまっているうちは、精神的な安定を保ってられるが、鋳型から逸脱した行動をとらざるを得ない場合は、不安が生じたたちまち困迷する。彼は斬新さ、革新的な事象を嫌悪し、より紋切り型にしがみつこうとするため保守的になる。

天皇制は、「万世一系」という伝統的イメージを民衆の中に植えつけてきた。これが伝統的価値態度の強い人々に対し強力にアピールしたことは容易に理解できる¹⁹⁾。

権威主義のパーソナリティの強い個人は、信奉の対象がより絶対的

で、普遍的であることを願望する（「権威主義的服従性」、「権力と頑強さ」）。天皇は過去においては、政治的および道徳的な最高権力を保有し、現在においても、その位置は政治機構から超越的、普遍的とも言える存在であるから、権威主義のパーソナリティの強い人にとっては、恰好の信奉的になり得る。

彼は、彼に内的葛藤をもたらし事象について、しばしば客観的な考察を回避し、それらを神秘的な権威の意向にゆだねることによって、緊張を回避し、あるいは緩和し、心理的な安定を得ようとするので、現実を超越した神秘的な領域においても、しばしば非合理的な権威さえ希望することがある（「迷信」）。

天皇は、戦前においては、神秘のベールをまとった存在であった。現在も、天皇に神的な権威を見い出している人々に対しては、天皇は吸引力を持つ。

「権威主義的服従性」、「反内省」、「過度の伝統的価値態度」等の強い人は、彼にとっての権威が明確な態度を示さない場合は、道徳あるいは伝統等の社会規範に拘束されることによって、心理的な安定を得る傾向がある。なぜなら、道徳や伝統、その他の社会規範自体が、彼にとって権威である場合が多いからである。従って非合理的な欲求不満の排出口を求めて行動を起こすとき、彼は道徳や伝統等の社会規範を遵守し、あるいは強化の方向へ向かってしまうのである。たとえば、権威主義的な序列を基調とした社会秩序や道徳、または彼にとっての権威を侵すものに対する極度な攻撃となって表現される。これが「権威主義的攻撃性」である。

従って「権威主義的服従性」、「反内省」、「過度の伝統的価値態度」に起因する「天皇支持者」は、これらの性向と連携する「権威主義的攻撃性」も強くなるのは当然である。

非合理的な欲求不満が慢性的であり、しかもその不満の排出口がない場合は、しばしば人間一般に対するそしりや、嫉妬に転位し、ときには建設を前提としない「破壊性」を招来するのである。

天皇制ファシズムの信奉者の精神構造を分析すると、彼の精神形態の一つとして、「建設を前提としない破壊性」がしばしば指摘される²⁰⁾。

また近代日本における「性」に関する「過度の禁欲主義的な性向」は、道徳や伝統その他の社会規範と一体となって形成されるので、権威

主義のパーソナリティの強い人は、「性」に対して過度に禁欲的になる。「天皇支持者」にこの傾向が強いのも、これらの理由に因ると考える。

以上、天皇を支持する心理と、権威主義のパーソナリティの関連について述べてきた。しかし両者の関連は環境にも大きく作用されるので、権威主義のパーソナリティの強い個人が必ず天皇支持に結びつくとは限らないし、また天皇支持者であれば必ず権威主義のパーソナリティが強いとも限らない。

権威主義のパーソナリティが個人と社会の狭間に発生する非合理的な「二次衝動」において形成される以上、より合理的な理由から天皇を支持するのであれば、権威主義のパーソナリティは強力ではないであろうし、また非合理的な「二次衝動」から天皇を否定するのであれば、権威主義のパーソナリティは弱くはないであろう²¹⁾。

社会的属性、イデオロギー等において、「高年齢」、「低学歴」、「無職」、「自民党支持層」、「神仏同時信仰者」、「非現代的価値観グループ」の権威主義のパーソナリティが高く、「天皇支持率」特に「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持率」が大きかったのは、これまで述べてきた権威主義的な性向をより多く共有している集団であるからだと考える。

b 天皇制ファシズムと権威主義のパーソナリティ

丸山真男は、『現代政治の思想と行動』の中で、ファシズム (fascism) の底に共通に潜む一定の精神傾向と発想傾向を次のように指摘した。

- (a) 自国あるいは自民族至上主義的傾向（しばしば逆に自国の被害妄想として、また輕蔑する「敵国」にうまく獲物をさらわれたという挫折感としてあらわれる）
- (b) 「自然的」優越者の支持という観念（そこから人種の差別論や人間関係の階層的編成への嗜好がうまれる）
- (c) 大衆の潜在的な創造力や理性的思考力に対する深い不信と蔑視（それは大衆をもっぱら操縦 manipulation の対象としてとらえ、したがって宣伝煽動はひとえに低劣な欲望の刺戟や感情的なアピールをねらう）
- (d) 婦人の社会的活動能力への疑惑（したがって婦人を家庭と育児の仕事へ封じ込める傾向）
- (e) 知性と理論よりも本能・意思・直観・肉体的エネルギーの重視

(f) 一般に進歩の観念に対するシニカルな否定

(g) 戦争の讃美と恒久平和に対する嘲笑（この(e), (f), (g)に関連して、社会科学を無用ないし危険視し、自然科学、しかももっぱら軍事的な科学技術を「尊重」する傾向）

〔丸山真男, 1964, p.300〕

これらの7点に対して社会心理学的な用語を適用すれば、

(a)は「投射性」、「過度の伝統的価値態度」、「ステレオタイプ」

(b)は「権力と頑強さ」、「ステレオタイプ」、「権威主義的攻撃性」

(c)は、「反内省」

(d)は「権力と頑強さ」、「過度の伝統的価値態度」、「権威主義的攻撃性」、「権威主義的服従性」

(e)は「反内省」、「権力と頑強さ」

(f)は「シニズム」、「過度の伝統的価値態度」、「反内省」

(g)は「破壊性とシニズム」

と換言できる。これらはいずれも権威主義のパーソナリティを構成する性向である²²⁾。

このように考えると、丸山の指摘したファシズムの精神傾向と発想傾向は、権威主義の性向を基盤にして、近代社会の危機の様相との関連で具体性を帯びたものにほかならない。

その上、天皇制自体が民衆の権威主義のパーソナリティを背景に成立したこと、戦前と類似の天皇支持形態と考えられる「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持」が、権威主義のパーソナリティと最も深く関連していたことを考え合わせると、天皇制ファシズムも権威主義のパーソナリティを背景にして成立したことは間違いない。

多くの政治学者は、ドイツのナチズム (nazism) と天皇制ファシズムの相違として、前者は「下からのファシズム」で、後者は「上からのファシズム」であることを指摘する。つまりドイツのナチズムの場合は、小商店主、職人、ホワイトカラー、労働者等から成る下層中産階級が自ら立ち上がって、自らの非合理的衝動に操作されて体制を倒し、新しい権力を作り上げようとした²³⁾。これに対して日本においてはファシズムを唱える民間右翼が存在したが、彼らが直接天皇制ファシズムを生む原動力となったのではなく、軍部のファシストに吸収され、軍部の指導のもとに、天皇制ファシズムを生み出した²⁴⁾。確かにドイツの民衆の場合

は能動的で、日本の民衆の場合は受動的な様相を呈している。しかし両者は共に権威主義のパーソナリティを基盤にして成立したという観点に立てば、決して異種のものとは言えない。

「二次衝動」²⁵⁾が行動となって表れる場合、その表現形態は表層における倫理的理念、社会理念およびそれらによって自己の内部に定着した価値観が許容するような形態で現れる。すなわち権威主義社会においては「二次衝動」は権威主義的な行動様式として具現化する。権威主義的な社会機構が人間にとって物質的にも精神的にも負的存在であるにもかかわらず、抑圧によって生じた不満を行動として表現しようとする時、その行動は権威主義社会を容認し、促進する方向へと働くのである。

ドイツナチズムにおいては体制への反逆感情が存在したが、同時に彼ら自身が性格構造において権威主義的な理念の奴隷でもあった。そのように奴隷状態が、旧体制を倒しながら彼らの内に存在した起爆的要素を極端な反動へ奔ることに消耗させた²⁶⁾。

天皇制ファシズムの場合は、民衆の中の起爆的要素は、外部に対しては向けられても、体制に対する反逆的な感情として大きく育つことはなかった。それは天皇制が所有していた権力があまりにも強大であり、また民衆の非合理的な権威主義的な衝動を、天皇制という統制された機構の中で転位させることができたからである。

ここに天皇制ファシズムもドイツナチズムも、同種のパーソナリティを基盤にして成立しながら、両者の形態において異なる所以があるのではなかろうか。

c 象徴天皇と権威主義のパーソナリティ

——むすびにかえて——

「象徴天皇支持」は現在の支持形態であり、「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持」は、戦前の残存的支持形態である。当然のことながら、両者の権威主義のパーソナリティの強度には差が見られた。後者の側に立つ人は、前者の側に立つ人よりも権威主義のパーソナリティは強力であった。これは戦後の日本の政治機構、社会機構の変化に、民衆の精神構造が対応して変化したということを表すものではなかろうか。もしそうなら「政治的または道徳的シンボルとしての天皇支持者」は、政治機構、社会機構の変化に適応しきれず、今もなお自らの内部に

強力な権威主義のパーソナリティを存続させていることになる。

それでは「象徴天皇」は、民衆にとって如何なる意味を持っているであろうか。「象徴天皇支持者」と言えども「天皇不支持者」と比較すれば、権威主義のパーソナリティは格段強かった。天皇の位置は形態上変化したとは言え、その存在自体、民主主義の理念を追求すれば、相矛盾することに変わりはない。それにもかかわらず、なおも存続させているのは、ほかならぬ民衆の間に存在する権威主義のパーソナリティに因るところが大きい²⁷⁾と言えよう。

日本憲法に規定されている「象徴」というひとつの言葉が、多くの民衆に対してどれほど莫大な影響を及ぼしてきたか筆舌に尽くしがたい。「象徴」ではなく、天皇の存在理由をより具体的に表現する言葉によって天皇の位置が規定されていたのであれば、これまでのように天皇の戦争責任に対する批判を封じることではできなかったかもしれない。

この「象徴」という言葉は、彼らに現実的な御利益のないものを、あたかも彼らを結ぶ何か目に見えない高次元なものや、普遍的なもののように錯覚を起こさせる。これも内なる権威主義のパーソナリティに因るところが大きい。

非合理的な伝統的権威が象徴化すると、それを保守する立場の人は、情緒的アピールによって具体的内容の欠如を埋めようとしたり、説得とは異なった手段を行使しようとする。

前者はマス・コミを利用しての「人間天皇」の強調や、事大主義的な報道に見られ²⁸⁾、後者は全く正当な根拠の乏しい建国記念日、「君が代」の制定、金鵄勲章の復活等、一連の反動化の中に見られる。

これらの情緒的アピールや権威の偽造を容易にしているのも、ほかでもない民衆の内に存在している権威主義のパーソナリティである。

極論すれば、「象徴天皇」は、具体的内容を伴わない権威を真の権威と錯覚する権威主義的な人間にとって権威に見えるのであり、そう考えない反権威主義的な人間にとっては権威ではないのである。

真の意味での資本主義は、非合理的な伝統的権威を否定する²⁹⁾。従って内容を伴わない非合理的な伝統的権威と言うべき「象徴天皇」を、為政者の間で補強する動きがあるのは、現代日本の資本主義体制が矛盾を抱えているためではなからうか。

真の意味での資本主義が高度に成長すればするほど、非合理的な伝統的

権威は否定されるはずであるから、「象徴天皇」すら次第に民衆にとって無価値化されていくであろう。それは喜ぶべきことであるか。否。なぜなら、たとえ真の資本主義が非合理的な伝統的権威を排除するとは言え、資本主義自体に、非合理的な伝統的権威から解放されたその分だけ、あるいはそれ以上に、なおも人間にとっての真実の自由を疎外する別の要素が含まれているからである。そして、これまで全く予想すらされなかったような新たな形態の新権威主義を生産する可能性すら潜ませているのである。

〔注〕

- 1) 川島武宜『日本社会の家族的構成』参照。現在では同様の主張をする人は多々見られる。
- 2) 4) を参照されたい。
- 3) 同上。
- 4) 権威主義のパーソナリティの性向として次の9つがあげられる。
 - (1)権威主義的服従性；内集団における道徳的権威または政治的権威に対して、外形的な服従ではなく、これを抗し難いものと意識し、進んで服従しようとする性向。
 - (2)権威主義的攻撃性；内集団における政治的または道徳的権威を侵すものを警戒し、拒絶し、罰しようとする性向。
 - (3)反内省；自分自身の意識過程や行動の動機などについて、観察したり反省したりしない性向。またはこれらに対する不信と反抗。
 - (4)性；性的行為に対する誇大な関心と過度の禁欲主義的性向。
 - (5)投射性；自己の中に存在する一面を、無意識に他者の中に投げ込み、それを他者のものと考えようとする性向。ただしこの場合の投射性は、自己の敵意、反感、嫉妬等が投射される場合である。
 - (6)ステレオタイプ (stereotype) と迷信；一定のカテゴリー (category) について（例えば民族や集団について）現実認識が単純で固定し、偏見を含んで考える性向。
(個人の) 運命が神秘的、超自然的なものによって決定されるという信念。
 - (7)権力と頑強さ；肉体、精神の強さの誇大な主張。支配——服従、強——弱という次元にとらわれる性向。
 - (8)過度の伝統的価値態度；伝統的に受け継がれてきた行動様式に、たとえそれが非合理であっても、何らの疑念も持たず、それに従うことに満足

している態度。

- (9) シニズム (cynicism) と破壊性；人間性に対するそしり。建設を前提としない破壊性。

斉藤哲雄「日本人の権威主義のパーソナリティに関する研究(1)」(成城文藝95号) p. 89~91, Adorno, T. W., Brunswik, E. F., Levinson, D. J., Sanford, R. N., 『The Authoritarian Personality』1950 p. 228 参照。

- 5) 同上, 斉藤「日本人の権威主義のパーソナリティに関する研究(1)」p. 72~74 参照。
- 6) 井上清『天皇制』p. 71~74 参照。
- 7) 外者接待；異郷人・他村民に対して一般に反撥感が強く調和しがたいのに、村に訪れてくるある種の異郷人に対しては、特に好意をもって鄭重に接待するふうが古い時代には濃かった。…中略…賓客を意味するマロウドはマレビトすなわちきわめて稀な来訪者の概念に由来するように、マレビトはさながら遠方から訪れてくる神の化現のごとく見なされ、これを接待せねば罰があたると考えられた。…中略…なお「常陸風土記」にみえる新嘗の折の富士・筑波と祖神との説話、伝説の弘法清水譚などは、来訪する聖者に対する態度の善悪が幸不幸にかかわることをさす説話として、民衆の道徳観形成に強くあずかって来たものである。
- (和歌森太郎, 『日本民俗事典』, 弘文堂, 1972)
- 8) グラフ2-14, 「天皇支持理由とA平均スコア」を参照されたい。
- 9) 詳細は15) 参照。
- 10) 「中道四党」は、公明党, 民社党, 新自由クラブ, 社会市民連合(社会民主連合の前身)を指す。サンプル数の関係により併合した。
- 11) 同上の理由により併合した。
- 12) 「1. 神, 2. 仏, 3. 奇跡, 4. 易や占い, 5. お札やお守りの力, 6. 何も信じていない, の中から信じているものを選択する(複数も可)」質問に対して,
- ①神と仏を同時に信仰している人々……「神仏同時信仰者」グループ
- ②「神または仏一方のみの信仰者」グループ
- ③神または仏は信じていないが、奇跡, 易や占い, お札やお守りの力等のうち、一つ以上信じている人々……「神仏以外の信仰者」グループ
- ④何も信じていない人々……「無信仰者」グループ
- の4グループに分類した。

斉藤「日本人の権威主義のパーソナリティに関する研究(1)」p. 72~74

参照。

- 13) 「個人の身分・地位の高低を決定すると考えられるものを、『職業』、『学歴』、『家柄』、『有名』、『財産』、『収入』、『その他』の中から特に2つ選択する」質問に対して、

①「家柄」、「学歴」、「有名」、「その他」のうち二者を選択した人々……
「非現代的価値観グループ」

②「財産」、「収入」、「職業」、「その他」のうち二者を選択した人々……
「現代的価値観グループ」

③「家柄」、「学歴」、「有名」のうち一つと、「財産」、「収入」、「職業」のうち一つを組み合わせて選択した人々……「中間的価値観グループ」

の3グループに分類した。

斉藤「日本人の権威主義のパーソナリティに関する研究(1)」p. 69～72
参照。

- 14) ナショナリスティックな優越感に関する

Q 5 日本は一流国である。

Q10 日本は今でも外国から見習うことが多い。

Q24 日本人は他の国民と比べてすぐれた素質を持っている。

の各質問に対して、Q 5、Q24には陽反応、Q10に対しては、陰反応に1点を落とし、これらの合計点をNスコアとし、Nスコアの高得点者ほど、ナショナリスティックな優越感が強いとした。

斉藤「日本人の権威主義のパーソナリティに関する研究(1)」p. 68～69
参照。

- 15) 次の権威主義のパーソナリティに関する15項目の質問に対して、被調査者に「大いに賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらとも言えない」、「どちらかといえば反対」、「大いに反対」という5段階の回答カテゴリーのいずれかによって回答させたものに、それぞれ4点、2点、0点、-2点、-4点の得点を落とし、その合計点をもってAスコア（権威主義の態度スコア）とし、Aスコアの高得点者ほど権威主義のパーソナリティは強いとした。

Q 2 政治のことは政治家に任せておくべきで、国民は自分の仕事に専念すべきである。(1. 権威主義的服従性, 2. 反内省)

Q 3 現在の若者はあまりにも柔弱に（よわよわしく）なりすぎているので、もっときびしいんれんと、仕事に対する意欲が必要である。(1. 権威主義的攻撃性, 2. 権力と頑強さ)

Q 4 困ったことや苦しいことがあるときは、何も考えないで愉快的こと

に熱中するのが最もよい。(反内省)

Q 6 人の一生は生まれたときから、もはや運命によって決められている。(1. ステレオタイプと迷信, 2. 反内省)

Q 7 人間は生まれつき能力に違いがあるのだから、能力のあるものが能力のないものの上に立つ(支配する)のは当たり前である。(権力と頑強さ)

Q 8 戦争は人間の本能に深く根ざしたものであるから(たとえ社会制度が変わっても)、戦争を世の中からなくすることはできない。(シニシズム)

Q 9 婦女暴行のような性犯罪を犯した者は、公衆の面前でのむち打ち、あるいはそれ以上の刑罰を受けるべきである。(性)

Q11 戦後、義理・人情の念がうすれたという声をよく聞くが、こういう日本古来の道徳を、今後ももりたてていく必要がある。(過度の伝統的価値態度)

Q12 現在でもよく職場では新入りのものがお茶をくんだり、上役の雑用を引き受けたりするシキタリがあるようだが、そういうことはだれかがやらなければならないのだから、新入りがやるのが当然である。(1. 過度の伝統的価値態度, 2. 反内省, 3. 権威主義的服従性)

Q13 国の発展のためには、少数の人々が犠牲になることは、現実としてはやむを得ない。(権威主義的服従性)

Q14 両親に対して、愛情と感謝と尊敬の念を感じることもない人間は最も劣等な人間である。(1. 権威主義的攻撃性, 2. 権力と頑強さ)

Q16 どんなに科学が進歩しても、手相や占いもばかにできない。(1. 迷信とステレオタイプ, 2. 反内省)

Q17 もし顔に泥をぬられた(名誉が傷つけられた)場合には、あくまでも汚名をそそがなければならない。(権力と頑強さ)

Q18 人を見たら泥棒と思えということばがあるとおり、私どものまわりには危険なものがあふれているので、少しの油断もできない。(1. 投射性, 2. シニシズム, 3. ステレオタイプ)

Q19 若い独身の女性が、何人かの男性と肉体関係を持つのは犯罪的である。(性)

16) 齊藤「権威主義のパーソナリティに関する研究(1)」p. 62 参照。

17) ミルグラム (Milgram, S.) は、権威主義社会における服従の心理構造に関する実験を行ったが、その内容は次のとおりである。

「……記憶と学習の研究に参加するために、二人の人間が心理学研究室にやってくる。そのうち一人が、『教師』、もう一人が、『生徒』に指定

される。実験者は、学習に対する罰の効果を研究すると説明する。生徒は一室に案内され、椅子にすわる。余計な動きをするのを防ぐため、彼の両手をひもでしばり、手首に電極をつける。彼に二つずつ組になった単語のリストを学習しなければならないと言う。…中略…実験の本当の眼目は教師にある。…中略…教師に、向こうの部屋にいる人に学習テストを施行しなければならないと言う。生徒が正しく答えたら、教師は次の項目に移る。答えが誤っていたら、生徒に電気ショックを与えなければならない。教師は、最低のショック水準（15ヴォルト）からはじめ、生徒が誤りを犯すたびに、30ヴォルト、45ヴォルト、60ヴォルトと水準をあげてゆかねばならない。

『教師』は、実験に参加するために実験室にやってきた、本当は何も事情を知らない被験者である。生徒あるいは被害者は、芝居をするのであって、実際には、全然ショックは与えられない。実験の要点は、いやがる被害者にますます強い苦痛を与えるように命じられるという、測定可能な具体的場面において、人間がどこまでやるかを見ることにある。

どの点で被験者は実験者に従わなくなるであろうか。」

この実験結果について次のように述べている。

「最初のショックを送るのさえただごとではないのではないか。正常な心の持主がどうしてそんなことをする気になるのかと不思議がるのが、実験についての読者の最初の感想であろう。被験者はすぐ断わって実験室から去るであろうか？ しかし、そうした者はいまだかつて一人もないのが事実である。…中略…ストレスを感じた被験者は多く、また実験者に文句を言った被験者も多かったものの、そのかなりの割合の者が、送電器の最高のショック水準までつづけるのである。…中略…従順な被験者におけるもっとも一般的な思考調整は、自分の行為の責任が自分にあるとは思わないことである。合法的權威たる実験者にすべてのイニシアティブを任せ、自分の責任を放棄する。自分を、道德的責任をもって行動している人間ではなく、外的權威の代行者と見る。実験後の面接でなぜつづけたのかとたずねられたときの典型的な答えは、『わたしがやりたかったものではありません。言われた通りにしてただけです。』……」〔Milgram, S. 岸田秀訳, 1975, p. 19~25〕

- 18) 神島二郎は『近代日本の精神構造』、『文明の考現学』の中で、天皇制に潜在する「無責任性」について指摘している。

〔神島二郎『近代日本の精神構造』、岩波書店、1961、『文明の考現学』、東京大学出版会、1971〕

19) 「積極的天皇支持者」と「天皇不支持者」のA平均スコアの比較において最も大きな差が見られたのは、Q11「戦後、義理・人情の念がうすれたという声をよく聞かすが、こういう日本古来の道徳を、今後もあり立てていく必要がある。」の「過度の伝統的価値態度」に関する項目であった。(グラフ 2-13)。

20) 血盟団の中心人物たる井上日召は、公判において、「私には体系づけられた思想はないという方がよいと思います。私は理屈を超越していきまして全く直感で動いています。」と言い、破壊後の建設についての理論を持つことを意識的に拒否している。

丸山真男「日本のファシズムの思想と行動」、『現代政治の思想と行動』1964, p. 59 参照。

21) 「自民党支持者」のA平均スコアの低い人の特徴は、比較的若い年齢で、逆境においても物事を深刻に考え、自民党を支持することについても彼らなりに理論的理由を持っている人、すなわち「反内省」的傾向や、「過度の伝統的価値態度」から脱却している人たちであった。

斉藤「権威主義のパーソナリティに関する研究(1)」p. 75 参照。

「二次衝動」については、25) を参照されたい。

22) 4) 参照されたい。

23) Fromm, F. E. 「Psychology of Nazism」『Escape From Freedom』1965 参照。

24) 丸山真男「日本のファシズムの思想と行動」, 「ファシズムの諸問題」, 『現代政治の思想と行動』1964参照。

25) ライヒ (Reich, W.) は、彼の唱える性・エネルギー経済学に基づいて、人間の性格構造を三層 (three different layers) に分類した。

彼によれば、第一層すなわち表層 (surface layers) は、社会的共同作業をつかさどる層で、欺瞞にみち抑圧された層である。第二層は人間の表層と深層を媒介する性格層であり、フロイト用語では無意識 (unconscious) ないし抑圧層 (what is repressed) と呼ばれ、ライヒのことばでは二次衝動 (secondary drives) と呼ばれるものの総体をさしている。第三層、すなわち深層は生物学的に核と呼ばれる層 (biologic core) で、この最深の層において、人間は好ましい社会的条件のもとなら、理にかなった愛、憎を抱く、誠実で勤勉で協力的な生物になるという。

表層部分では、平均的な人間は、礼儀正しく、他人に共感を持ち、誠意もある。しかしそれは、倫理的・社会理念に抑制されていることを意味し、最深層における一次的な生物学的核は疎外されている。生物学的な核に

由来するあらゆる自然的衝動、社会的衝動、リビドー衝動 (libidinous impulse) は、生物的な核を疎外するように機能する倫理的・社会理念に阻止されるので、そのままの形では社会的表現とはなり得ない。そのため生物的な欲求は、表層と深層の間に鬱積し、二次衝動の層を形成する。

従って、二次衝動の層は、残酷で加虐的、好色的、略奪的、嫉妬深い衝動等で構成される。生物的な衝動は行為に転化する場合、この偏向した層を通過するために、倒錯衝動 (perverse drives) に転換し、その結果いかなる自然な行為をも制止する。

人類の歴史の中で、彼が権威主義的思考方法を身につけ、彼の中の生物核が目やふさがれていく過程において、この二次衝動は成長し拡大していった。そして近代、自由主義 (真の自由主義を意味するものではない) と称する倫理的・社会理念による極度な抑圧が、人類を自滅へと追いやる危険性をはらむまでに、二次衝動は拡大していった。

二次衝動は、表層における倫理的・社会理念の形態を借りて生物的な欲求とかけ離れた屈曲した形態で、実際の行動に現われる。この行動の中に、政治学の分野でファシズムと呼ばれているものも含まれる。(Reich, W. 『The Mass Psychology of Fascism』, 1975 参照。)

- 26) ライヒは、ドイツナチズムにおける行動について、心理的に次のように説明している。

……平均的労働者は、二者択一で割り切れるほど革命的でも保守的でもないという事実を発見できたであろう。むしろかれ労働者は、一つの葛藤状態 (contradiction) にある、と言うべきであろう。なぜならば、一方においてかれの心理構造は、かれのおかれている社会的立場から派生し、それゆえにかれを革命的にする。しかし他方、かれのおかれている権威主義的な社会環境 (atmosphere of authoritarian society) から、かれを保守的にもするからである。こうしてかれの革命的傾向と保守的傾向はたがいにせめぎあって葛藤状態を形成する。…中略…同じことが、もちろん中産階級の成員にもあてはまる。かれが危機的状態 (crisis) において「体制」(system) に反逆するのは、ただちに理解できる。——経済理論がどうしても理解できないのは、中産階級の成員がすでに窮乏化の過程をたどっているのに、なぜ革新を恐れ極端な反動に走るかという事実である。かれもまた、反逆の感情 (rebellious feeling) と反動のイデオロギー (reactionary aims and content) の相克に悩んでいるのである。〔() 内筆者加筆〕

(Reich, W. 平田武靖訳, 『ファシズムの大衆心理 (上)』, 1975, p. 58~

- 27) 1976年4月25日付の朝日新聞には、「奇妙な人気、海洋博協賛記章、もてる“勲章そっくり”、募集前から注文殺到」という見出しで、次のような記事が載っていた。

協会業務部の電話は鳴りっぱなし。十四日までに四千三百人から寄付の予約申し込みがあり、別に四百万円（三百人分）の“勲章代金”が現金書留で送り込まれてきた。

協会業務部長で国民運動推進本部事務局長を兼ねる矢崎朝道さんの話によると、申込者からの手紙には「家宝にしたい」「胸に飾りたいが、汚れると困るから略綬も同時に作ってくれないか」などと書かれているとか。

〔朝日新聞1976年4月25日〕

- 28) 石巻靖治「70年代新聞のタブー」『現代ジャーナリズムⅡ新聞』1973, p. 54～55 参照。
- 29) Fromm, F. E. 『The Art Of Loving』1976, p. 72 参照。

〈主な参考文献〉

- Adorno, T. W., Brunswik, E. F., Levinson, D. J., Sanford, R. N., *The Authoritarian Personality*, American Jewish Committee, 1950.
- Felice, R. D. 藤沢道郎, 本川誠一訳『ファシズム論』平凡社, 1973.
- Fromm, F. E., *Escape From Freedom*, Fifteen Printing, Avon Books, 1965.
- Fromm, F. E., *The Art of Loving*, Perennial Library Harrer & Row, 1974.
- 久野収, 神島二郎編『天皇制論集』, 三一書房, 1974.
- 藤田省三, 『天皇制国家の支配原理』未来社, 1966.
- 石巻靖治「70年代新聞のタブー」, 城戸又一編『現代ジャーナリズムⅡ新聞』時事通信社, 1973.
- 井上清, 『天皇制』東京大学出版会, 1953.
- 色川大吉, 『新編明治精神史』第5版, 中央公論社, 1974.
- 神島二郎, 『近代日本の精神構造』岩波書店, 1961.
- 川島武宜, 『日本社会の家族的構成』日本評論社, 1950.
- 丸山真男, 『現代政治の思想と行動』増補版, 未来社, 1964.
- Milgram, S., 岸田秀訳『服従の心理』河出書房新社, 1975.
- 日本史研究編, 『日本の建国』青木書店, 1966.
- Reich, W. *The Mass Psychology of Fascism*, Reprint, Pelican Books,

1978（邦訳平田武靖，せりか書房）。

三一書房編集部編、『「天皇制」論集第二輯』三一書房，1977。

遠山茂樹，『明治維新』改版，岩波書店，1972。

斉藤哲雄「日本人の構威主義のパーソナリティに関する研究（I）——社会的属性等との関係について」『成城文藝第95号』，成城大学文芸学部編，1981。